

ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ②

クーデターから2年となる2月1日、ミャンマー国軍はクーデターとともに発令した非常事態宣言を半年間延長すると発表した。しかし民主主義の回復をもとめる国民の抵抗はやまない。同日、民主派勢力が軍政に反対して呼びかけた「沈黙のストライキ」に大半の市民が参加、外出を控えた。また民主派勢力の国民防衛隊（PDF）と国軍との戦闘は激化している。長期化する軍政下で、命を奪われる国民の数は増えつづけ、経済は低迷、「ミャンマーは危機的な状況」（国連人権高等弁務官）にある。米国のバイデン大統領は「われわれはミャンマー国民の側に立つ」と明言、欧米諸国は国軍への制裁を強化しているが、日本政府は依然として旗幟を鮮明にしない。私たちが平和と民主主義を尊重する国の一員であるなら、この基本精神に反する為政者の姿勢を一人ひとりの市民の力で変えていかなくてはならないだろう。（永井 浩）

◆2023年02月01日 日刊ベリタ

「日本政府は対ミャンマー政策の再構築を！」

クーデターから2年 市民団体が共同声明を政府に提出

国軍クーデターから2年になる2月1日、日本の政府開発援助（ODA）が国軍の資金源になっているとして「#ミャンマー国軍の資金源を断て」キャンペーンを行ってきたNGO5団体は、共同声明「日本政府は対ミャンマー政策の再構築を！」を政府に提出した。また民主派の国民統一政府（NUG）駐日代表事務所とミャンマーの民主化を支援する議員連盟の同日の院内集会で、駐日代表はNUGを正統な政府として承認するよう求めた。国連の人権問題報告者は前日、日本も国軍への制裁に加わるよう求めた。

共同声明は、同キャンペーンの構成団体であるメコン・ウォッチ、アーユス仏教国際協力ネットワーク、国際環境 NGO FoE Japan、日本国際ボランティアセンター（JVC）、武器取引反対ネットワーク（NAJAT）と宗教者、大学教員、ジャーナリスト、弁護士、作家らが呼びかけ、約500名の団体・個人の賛同を得た。

声明によると、クーデター以降、同国では国軍や警察による民間人に対する暴力が継続し、多数の死傷者及び拘束者が発生している。国連の昨年12月初旬の報告によると、ミャンマーには推定147万3千人の国内避難民（IDP）がおり、そのうち、クーデター以降に新たに避難民となった人は114万3千人にも及ぶ。また、国軍の無差別砲撃や空爆により、子どもを含む多数の民間人が死傷している。弾圧に追い詰められ、武器を手にした若者も少なくなく、各地で武力衝突が発生し、事態は混迷を極めている。

このような事態に陥った原因は、ミャンマー国軍が選挙で国民の圧倒的な支持により選ばれた政府を打倒したことにある。

日本政府はクーデター以降、ミャンマー国軍に対し、暴力の即時停止、拘束された関係者の解放、民主的な政治体制の早期回復を求めている。しかしこの2年間、日本政府の呼びかけは何ら効果を上げていない。それどころか、日本政府のミャンマーに対する働きかけには大きな矛盾がある。

国軍が選挙で選ばれた政府を倒した後も、日本政府は、二国間の約束に基づくはずの政府開発援助（ODA）を継続している。更に、2022年に経済開発担当の内閣官房内閣審議官がミャンマーを複数回訪問し、国軍の設置した国家統治評議会（SAC）の高官と面会もしている。そのうえ、会談内容は明らかにされていない。このような日本政府の対応は、国際法に違反し人権侵害を続ける国軍と日本政府の親密

な結びつきを想起させ、ミャンマーの市民から批判を受けている。また SAC との経済的な関係を維持することは、平和、自由、平等、民主主義、人権、法治などの「普遍的な価値」を外交の柱に据えていると標榜する政府方針とも矛盾している。

これらの点を踏まえ、声明は以下の点を強く要請する。

1. ミャンマー国軍が暴力を停止し、恣意的に拘束した全ての人々を解放し、かつ、国民民主連盟（NLD）関係者や民主化を求める市民、少数民族武装勢力等も含めた対話の上で、民主化移行プロセスへの復帰を具体化するまで、ODA などの政府による経済協力は一旦これを全て停止すべきである。
2. 国軍とその上層部は、軍系企業とその経済網から莫大な利益を得ていることが明らかとなっていることから、国軍や国軍系企業の関与するビジネスは日本の官民共にこれを停止すべきである。
3. ミャンマー国軍がクーデター以前から長期にわたり、民主主義を求める市民やビルマ民族以外の自治を求める民族、宗教マイノリティに対して、凄惨な暴力を行使し、その権力を維持してきたことをあらためて認識した上で、今後の対ミャンマー政策を再構築すべきである。
4. ミャンマーの市民の支持する国民統一政府（NUG）や少数民族地域の各グループ、また市民グループなど幅広いステークホルダーと対話し、生存を脅かされている避難民へ国境を越えた援助ができる体制を、日本政府が国際社会と共に築いていくことを強く求める。

いわゆる 2011 年の民政化は、軍事政権が制定した 2008 年憲法の下で、内務、国境、国防などの武装組織を指揮する省庁は国軍の支配下にあり、選挙によって選ばれた文民主導の政府との間で権力を分担する不十分な民主化でしかなかった。それにも関わらず、日本は官民共に経済的な支援を優先し、ミャンマーの真の民主化を求めてこなかった。それ以前の 1990 年代から、日本は官民でミャンマーの海上ガス田開発に関与し、当時の軍政に莫大な利益をもたらしてもいる。このことを私たちが含め深く反省する必要もある。その上で、ミャンマーの人々との新たな関係を築く努力を始める時である。

▽NUG 駐日代表「NUG を正当政府に」

ミャンマー・ジャポンによると、民主派の国民統一政府（NUG）駐日代表事務所とミャンマーの民主化を支援する議員連盟が、「ミャンマーに民主体制、平和と自由を取り戻す」をテーマとした院内集会を参議院議員会館で共催した。

超党派の国会議員で構成する「ミャンマーの民主化を支援する議員連盟」の中川正春会長は、人口の 3 分の 1 が飢餓に苦しみ、150 万人を超える避難民と多数の死傷者が発生している現状に触れ、日本政府に対して国会で採択された軍事クーデターを非難する決議に則った外交政策を実施するよう改めて求めた。

NUG のソーバラテイン駐日代表は、日本政府に対し 1 日も早く NUG を正統な政府として承認すること及び 8 月に予定されている総選挙の実施を認めないよう求め、就労や留学目的で来日しているミャンマー人の多くがパスポートの期限を迎えている現状に触れ、ビザの更新について寛大な処置を要望した。

武井外務副大臣は、困窮者への支援について必要とする人に届くために安全で阻害されない人道アクセスができるよう、日本政府として具体的な人道支援の在り方を検討し、実施していくとの考えを明らかにした。

また時事通信電によると、ミャンマーの人権問題を調べる国連のアンドリュース特別報告者は 1 月 31 日に公表した報告書で、日本に対し、国軍関係者らに対する制裁網への参加や、軍関係者の即時国外追放を促した。

報告書は、ミャンマー国軍が設置した最高意思決定機関「国家統治評議会（SAC）」について「正統な政府ではなく、承認されるべきではない」と強調。国連加盟国に対し、承認につながる行動を慎み「SAC を外交的に孤立させる」よう求めた。

日本や韓国など、ロシアのウクライナ侵攻で制裁を発動しながらミャンマー危機では制裁を見送っている国に対しては「直ちに制裁を科すよう勧告する」と訴えた。さらに日本に関し、防衛省が国軍からの留学生を受け入れている状況に言及。就学期間の終了を待たず、直ちに国外追放するよう要請した。また、政府開発援助（ODA）を含む全ての経済支援が

SAC の利益となっていないか、再調査するよう提言した。

ニューヨークの国連本部で会見したアンドルーズ氏は「ウクライナ危機で取られている協調的な戦略

アプローチが、ミャンマーには欠けている」と指摘。国際社会が一致して行動することが重要だと語った。

【共同声明全文】2023年2月1日

クーデターから2年 日本政府は対ミャンマー政策の再構築を

2021年2月1日にミャンマー国軍が引き起こしたクーデター以降、同国では国軍や警察による民間人に対する暴力が継続し、多数の死傷者及び拘束者が発生している。国連の12月初旬の報告によると、ミャンマーには推定147万3千人の国内避難民（IDP）があり、そのうち、クーデター以降に新たに避難民となった人は114万3千人にも及ぶ。また、国軍の無差別砲撃や空爆により、子どもを含む多数の民間人が死傷している。弾圧に追い詰められ、武器を手にした若者も少なくなく、各地で武力衝突が発生し、事態は混迷を極めていく。このような事態に陥った原因は、ミャンマー国軍が選挙で国民の圧倒的な支持により選ばれた政府を打倒したことにある。日本政府はクーデター以降、ミャンマー国軍に対し、暴力の即時停止、拘束された関係者の解放、民主的な政治体制の早期回復を求めている。しかしこの2年間、日本政府の呼びかけは何ら効果を上げていない。それどころか、日本政府のミャンマーに対する働きかけには大きな矛盾がある。

国軍が選挙で選ばれた政府を倒した後も、日本政府は、二国間の約束に基づくはずの政府開発援助（ODA）を継続している。更に、2022年に経済開発担当の内閣官房内閣審議官がミャンマーを複数回訪問し、国軍の設置した国家統治評議会（SAC）の高官と面会もしている。そのうえ、会談内容は明らかにされていない。このような日本政府の対応は、国際法に違反し人権侵害を続ける国軍と日本政府の親密な結びつきを想起させ、ミャンマーの市民から批判を受けている。またSACとの経済的な関係を維持することは、平和、自由、平等、民主主義、人権、法治などの「普遍的な価値」を外交の柱に据えていると標榜する政府方針とも矛盾している。これらを踏まえ、私たちは以下の点を強く要請する。

1. ミャンマー国軍が暴力を停止し、恣意的に拘束した全ての人々を解放し、かつ、国民民主連盟（NLD）関係者や民主化を求める市民、少数民族武装勢力等も含めた対話の上で、民主化移行プロセスへの復帰を具体化するまで、ODAなどの政府による経済協力は一旦これを全て停止すべきである。
2. 国軍とその上層部は、軍系企業とその経済網から莫大な利益を得ていることが明らかとなっていることから、国軍や国軍系企業の関与するビジネスは日本の官民共にこれを停止すべきである。
3. ミャンマー国軍がクーデター以前から長期にわたり、民主主義を求める市民やビルマ民族以外の自治を求める民族、宗教マイノリティに対して、凄惨な暴力を行使し、その権力を維持してきたことをあらためて認識した上で、今後の対ミャンマー政策を再構築すべきである。
4. ミャンマーの市民の支持する国民統一政府（NUG）や少数民族地域の各グループ、また市民グループなど幅広いステークホルダーと対話し、生存を脅かされている避難民へ国境を越えた援助ができる体制を、日本政府が国際社会と共に築いていくことを強く求める。

いわゆる2011年の民政化は、軍事政権が制定した2008年憲法の下で、内務、国境、国防などの武装組織を指揮する省庁は国軍の支配下にあり、選挙によって選ばれた文民主導の政府との間で権力を分担する不十分な民主化でしかなかった。それにも関わらず、日本は官民共に経済的な支援を優先し、ミャンマーの真の民主化を求めてこなかった。それ以前の

1990年代から、日本は官民でミャンマーの海上ガス田開発に関与し、当時の軍政に莫大な利益をもたらしている。このことを私たちも含め深く反省する必要もある。その上で、ミャンマーの人々との新たな関係を築く努力を始める時である。

【呼びかけ団体】

メコン・ウォッチ、アーユス仏教国際協力ネットワーク、国際環境 NGO FoE Japan、日本国際ボランティアセンター(JVC)、武器取引反対ネットワーク(NAJAT)

【呼びかけ人】

雨宮処凛(作家・活動家), 秋林こずえ(同志社大学教員), 稲葉剛(立教大学大学院客員教授), 飯塚拓也(日本キリスト教協議会東アジアの和解と平和委員会), 飯島滋明(名古屋学院大学教授 憲法学・平和学), 岡田隆法(真言宗豊山派), 太田昌国(評論家・編集者), 大河内秀人(見樹院住職・INEB メンバー), 大野和興(日刊ベリタ編集長), 亀山仁(写真家), 畠山澄子(ピースボート), 瀬戸厚(明治大学国際武器移転史研究所客員研究員), 佐々木寛(新潟国際情報大学教授(政治学)), 佐伯奈津子(インドネシア民主化支援ネットワーク), 志田陽子(武蔵野美術大学造形学部教授), 清水雅彦(日本体育大学教授(憲法学)), 瀬戸大作(一般社団法人反貧困ネットワーク事務局長), 高原孝生(明治学院大学教員), 竹信三恵子(ジャーナリスト), 武井由起子(弁護士), 武田隆雄(日本山妙法寺僧侶), 平良愛香(日本基督教団川和教会牧師), 高坂勝(NPO SOSA PROJECT), 筑紫建彦(憲法を生かす会), **永井浩(ジャーナリスト)**, 永山茂樹(東海大学教員), 中尾恵子(日本ビルマ救援センター代表), 中野晃一(上智大学教授), 根本敬(上智大学教授), 昼間範子(日本カトリック正義と平和協議会事務局), 東澤靖(明治学院大学法学部教授・弁護士), 村主道美(学習院大学法学部教授), 守屋友江(南山宗教文化研究所), 湯川れい子(音楽評論家・作詞家), 吉高叶(NCC 日本キリスト教協議会議長), 渡邊さゆり(アトゥトゥミャンマー支援 共同代表)

【賛同団体】(47 団体)

アトゥトゥミャンマー支援, (特活) アジア・コミュニティ・センター21, JEF(プレス・エージェント), NPO 法人 久留米地球市民ボランティアの会, NPO 法人ピラーンの医療と自立を支える会, RAFIQ (在日難民との共生ネットワーク), アジア開発銀行福岡 NGO フォーラム, アジア女性資料センター, アジア太平洋資料センター(PARC), イエズス会社会司牧センター, エナガの会, カトリック大阪大司教区社会活動センター・シナピス, カノン行政書士法務事務所, ふえみん婦人民主クラブ, ポレポレ佐倉, ミャンマー(ビルマ)の市民の訴えを聞く会, ミャンマーの今を伝える会, ミャンマーの人たちを支援する有志の会, ミャンマー民主化を支援する信州の会, ミャンマー問題を考える会, 医療と福祉の戦争協力に反対する連絡会議, 一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター, 基地のない沖縄をめざす宗教者の集い, 研究所テオリア, 公益財団法人アジア保健研修所(AHI), 自由と人権, 多文化共生と地域福祉の会, 地雷廃絶日本キャンペーン, 特定非営利活動法人 Alazi Dream Project, 特定非営利活動法人 APLA, 特定非営利活動法人シェア=国際保健協力市民の会, 特定非営利活動法人地球の木, 日刊ベリタ編集委員会, 日本カトリック正義と平和協議会, 日本ビルマ救援センター, NPO 日本ミャンマー豊友会, 日本山妙法寺, 認定 NPO 法人 世界の子供にワクチンを 日本委員会, 熱帯林行動ネットワーク(JATAN), 不戦へのネットワーク, 平和をつくり出す宗教者ネット, 豊川いのちと未来のネットワーク, **北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会・事務局**, 緑の党グリーンズジャパン 他3団体

【個人賛同】484 名

【声明に関する連絡先】特定非営利活動法人メコン・ウォッチ(担当 木口)
〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F 電話: 03-3832-5034 FAX: 03-3832-5039
Email: contact(@)mekongwatch.org (送信時は()をとる)

ミャンマー軍事クーデターから2年～

ミャンマーに民主体制と平和と自由を取り戻す院内集会～

ミャンマー国軍が軍事クーデターを強行してから2年となった今日、ミャンマーの民主化を求める集会が都内で開催された。主催は、超党派「ミャンマーの民主化を支援する議員連盟」（以下、民主化議連）。

集会には民主化議連に所属する国会議員のほか、日本で暮らす在日ミャンマー人や避難民支援に取り組む日本人支援者らが参加し、中にはロヒンギャ難民の姿もあった。

開会挨拶を担当したミャンマー国民統一政府（NUG）日本代表部のソーバラティン代表は、日本政府に対する要求事項として、「NUGをミャンマーの正当な政府として認めること」、「今夏に予定されている国軍主導の総選挙を認めないこと」の2点を挙げた。

民主化議連事務局長を務める立憲民主党の石橋通宏参院議員は、2021年6月に衆参両院で軍事クーデターを非難する決議を採択したことを紹介した上で、「日本政府には足りない所がまだある。議連としてはこれまで以上の対応をしていくつもりだ」と語った。

また、NUGの大臣らもオンラインで参加し現地の様子を報告した。ノースザンララソー女性・青年・児童担当大臣は「国軍は地上での支配地域を減らしつつある。そのため今は空爆による攻撃がメインだ」

ミャンマー「夜明け」への闘い(6)

「軍事独裁政権」を思い知った日

2月8日、月曜日。週末に盛り上がったデモは、平日になって落ち着くどころか、ますます膨張した。ミャンマー人たちは、仕事を休んで街に出た。同僚たちからも、朝から「今日はとても大事な日！デモに行ってくるよ！」と気合の入ったメッセージ。窓からは、ぬるい風に乗ってクラクションの音や、陽

とし、「どうか戦闘機用のガソリンを国軍に売らないで欲しい」と訴えた。

ミャンマーでは今夏にも国軍主導のもとで総選挙が実施される可能性が高く、今後も国軍の動向に注目が集まる。



開会挨拶を行うソーバラティン NUG 駐日代表



要請書を提出する在日ミャンマー人一同

西方浩実

気な音楽、人々が何かを叫ぶ声が途切れ途切れに聞こえてくる。

▽ピースフルな抗議行動

昼ごろ、大通りまで歩いてみて驚いた。すごい数の車が、ぎっしりと通りを埋め尽くしている！クラク

ションや音楽を鳴らしながら、赤い風船を揺らしながら、街の中心部を目指してゆっくりと南下していく。3本指を掲げる人や、赤い布を身につけている人の数も、昨日までとは比べものにならない。いつのまに作ったのか、アウンサンスーチー氏の解放を求める何種類ものポスターや、3本指をイラスト化した横断幕まである。

「抗議活動」というと物々しいけれど、青空の下、明るい音楽を響かせて人々が声をあげる姿は、デモというよりなんだかパレードを見ているような、ピースフルな雰囲気があった。それは、これが続けばもしかするとスーチーさんが解放されて、民主主義国家に戻るんじゃないか、と明るい未来を思い描けるような、希望に満ちた光景だった。私も自信をもって、3本指を突き上げる。人々とともに叫ぶ。民主主義を返せ！！

帰り道の途中、自宅近くの空き地で、白黒の A4 プリントをフェンスに貼りつけているおじさんを見かけた。プリントには「FREE Daw Aung San Suu Kyi (アウンサンスーチーさんを解放せよ)」という文字と、スーチーさんの写真。おじさんは伸びきったボサボサの髪に、擦り切れて穴の空いたロンジーを履いている。いわゆる貧困層だ。私の視線に気がつくと、今貼ったプリントを誇らしげに指さし、「見てくれ！」と、歯が抜けた口をあけてニカッと笑った。おじさんのまくし立てるミャンマー語の中で、私に聞き取れた言葉は一つだけ。「僕はスーチーさんが好き」。ああ、この人にとっても NLD 政権は優しかったのだろう、と思う。

この日もミャンマーでは、誰も暴動を起こさなかった。ただ、軍政への抗議と、民主主義、そしてアウンサンスーチー氏をはじめ拘束されたリーダーたちの解放を訴えた。

私は日記にこう書き綴った。「デモが始まったおかげで、こんなにもたくさんの仲間がいることを確認しあえた。元気が出た。こんな大勢の人が、平和にプロテストしている。ものすごい人数。これで変わらないわけがない！軍への怒りや憎しみを、こんな

風に前向きな Movement に変えることができるんだ。これを抑え込もうなんて、愚の骨頂だ！」

Faceook にも今日の様子を投稿する。私にわずかでもできることがあるとすれば、それは目の前の光景やミャンマーの友人たちの言葉を、日本語で発信することだった。とにかく、一人でも多くの日本人に伝えたかった。ミャンマーの人々がどれほど懸命に、そしてどれほど平和的に抵抗しているかを。

実際、ミャンマーの友人や同僚からはよく「日本のテレビではどう報道されている？」などと尋ねられる。彼らもよくわかっている。この軍事独裁を止めるには、日本をはじめ外国からの圧力や介入が絶対に必要なのだ。軍は非常事態宣言を出し、すでに国の全権を掌握したので、いざとなればミャンマー市民の抵抗を合法的に弾圧することができてしまう。でも外国からの目があれば、話は別だ。それに、もし諸外国が軍に厳しい制裁を課したり、国連や ASEAN (東南アジア諸国連合) などが介入したりすれば、軍は譲歩せざるを得ない。

もちろん私の個人的な発信に、そんな大それた力はない。それでも、ひとりでも多くの日本人がミャンマーで起きていることを知り、話題にしてくれたら、それが回りまわって日本政府の対ミャンマー政策を、あるべき方向に動かしてくれるかもしれない。ミャンマー軍を政府と認めないでほしいと、民主国家として立ち直るための交渉をしてほしいと、日本政府に伝えてくれるかもしれない。

一人ひとりの小さな力を結集させて、大きな抵抗運動を巻き起こしているミャンマーの人々を見ると、わずかでも可能性があるなら、私もここでできることはすべてやろう、という気持ちになっていた。

▽「世界はこの現実をきちんと見てほしい」

しかし、その日の夕方、軍はアナウンスを出した。内容は、抗議の声をあげた市民に対して「国家の安定と治安を混乱させる行為を防ぐために、法的措置をとる」というもの。そしてその直後、ミャンマー北部の一部地域で、突然新しい法令が発表された。

5人以上で集まらないこと。
公共の場で集会を開かないこと。
夜8時以降は、外出しないこと。

つまり、今日みたいに路上に集まってデモをしたら、明日は弾圧（あるいは逮捕）しますよ、という意味だ。啞然としているうちに、次々に他の地域でも同じ法令が出され始める。軍事独裁政権というのは、全権が軍に渡るとは、こういうことなのか・・・！全身の血が沸騰する思いがした。

みんな1人では心細くても、同じ気持ちをもった人が集まれば、動き出すことができる。それを見た人の気持ちも変わっていく。つまり集会の禁止というのは、単に集まることを禁じるものではなく、人の心の動きを封じるものだ。

ミャンマー人の同僚に電話をかけて「明日は全員出勤しないで」と伝える。憤りのあまり声を震わせる私に、彼は「I'm sorry」と言った。こんなときにミャンマーにいるなんて・・・君は日本人で、ミャンマーのために働いているのにね。

私をいたわってないで、もっと怒れよ！！と思った。でも、わかっている。彼だって、悔しくないはずがない。以前、軍政時代がどんなものだったのか私が尋ねたとき、彼はその不自由さや汚職の酷さを「ひどいもんだったよ」と苦笑まじりに説明してくれたのだ。それでも彼は「ネウウィン（注1）のときからずっと同じだ。これがミャンマー国軍なんだよ」と穏やかに言った。

私はミャンマーのことなど大してわかっていない日本人だ。でも、経済発展した国に生まれ、民主主義の中で呼吸をしてきた。自分たちのことは、自分たちで決められる国だった。おかしいと思うことはおかしいと言えた。だから、これがどんなに異常で憤るべきことかはわかる。

信じられない、ありえない、と繰り返す私に、50代の彼はこんな風に話してくれた。「僕の人生は、ほとんどが軍事政権だった。何度も立ち上がったけど、軍はいつも容赦なく僕らを撃った。僕らの払った税金で武器を買い、僕らを撃つんだ。狂っているよ。今、デモが盛り上がっているけど、僕は民衆が軍に勝てるとは、あまり信じられないんだ。奴らは、容赦なく撃つと思う」

明日ピタッとデモが止むのか、抗議運動が続くのか、わからない。警察や軍が拘束や弾圧に乗り出すのかどうか、それもわからない。そもそも、あんなピースフルなデモを、いったいどんな理由で弾圧するのだろうか・・・。それでも、抗議を続けるミャンマー国民の命は、軍の思惑ひとつでどうにでもなってしまう。だれの血も流れないことを、ただひたすら祈る。

最悪の事態になったら、きっと軍は再び通信を遮断するだろう。人々は連絡手段を失い、分断され、拘束され、デモは潰されてしまう。残された手段はCDM（公務員のストライキ）。それだけで、この軍政が覆るのだろうか・・・

週末にインターネットを遮断された時、ミャンマー人の同僚はこう言っていた。「今ミャンマーで起きていることを、世界はちゃんと見ているのかな」

ミャンマー人は、もうすぐ完全に手足を縛られてしまう。どうか忘れずに、見ていてほしい。そして日本政府に、ミャンマー国軍を政府として認めるなど、訴えてほしい。どうか、どうか。

<注1>

1974年から88年まで続いた軍事独裁政権（当時、ビルマ連邦社会主義共和国）において、実権を掌握していた人物

ミャンマー「夜明け」への闘い(7)

弾圧への恐怖に抗してデモへ

弾圧予告とも言えるアナウンスが出た翌日2月9日。デモは、おさまらなかつた。午前10時、今日も同僚から「デモに行ってくる」とメッ セージが届く。引き止めたいけど、引き止めたくない。だって軍に対抗するには、それ以外に、もう方法がないじゃない。

「OK、無事に帰ってきて」と返信し終えたあと、自分が息を止めていたことに気づく。自宅で椅子に座っているだけなのに、ものすごい緊張感で押しつぶされそう。Facebook や地元メディアのライブ配信を見る。まだ何も起きていない、まだ大丈夫だ、そう確認しながらも、マウスを握る手が汗で滑る。

大通りから少し離れた私のアパートに聞こえてくる、歓声や歌声。今日もデモは、非暴力だ。「軍政はいらない、私たちが選んだのはNLDだ!」「スーチーさんを返せ、民主主義を返せ!」

昨日までは、歓声や歌声が聞こえてくると「がんばれー!」と無邪気に応援していた。でも、今はただひたすら「お願い、みんな無事でいて」と祈っている。祈ることしかできない。苦しい。

午後1時頃、やはりデモは弾圧され始めた。首都ネピドー、そして古都バゴーで。デモ隊にむけられた放水銃は、人が吹き飛ばされるほどの水圧だ。水には催涙物質が含まれている、という情報もある。何の罪のない国民たちが、むしろクーデターの被害者である人々が、「政府」から一方的に暴力を振るわれる。この事実にも、こうなることを予想していたにも関わらず、私は全身がずっしりと重くなるようなショックを受けた。

▽ネピドーで少女が撃たれた!

そしてついにネピドーで、少女が撃たれた。直後からFacebook 上には、写真や動画が次々とアップされ始めた。少女が音もなくパタッと倒れる動画。血のついたヘルメット。少女のものとされるレントゲン写真。メディア各社は、どこよりも早く情報をつかもうと躍起になる。実弾か、ゴム弾か。死亡か、重症か。正直言って、どっちであろうともうどうで

西方浩実

もよかった。無抵抗の民衆を、警官が銃で撃った。それだけでもう十分すぎるほど、重い。

次はヤンゴンで銃声が聞こえるんじゃないか……。デモの群衆の中には、私の友人や同僚もいる。次々に彼らの顔が浮かぶ。みんなどこにいる?安全な場所にいる?緊張のあまり、吐き気すら覚える。

夜には、引き金を引いた警察官が特定された。

「MURDER (殺人者)」と書かれたフレームがつけられた写真がFacebook 上で拡散される。警察官の個人情報や家族も特定され「こいつだ」と示される。拡散される憎悪。嫌な流れになってきたな、と思う反面、そんなの自業自得だ、とも思う。

デモに参加している人々は、悪いことなど何一つしていない。国の秩序を乱したのは国民ではなく、クーデターを起こした軍に他ならない。人々は、突然奪われた権利や自由を「返してくれ」と、当たり前のように要求をしているのだ。でも軍は自分の権力を守るために、人を脅して、傷つけて。こんなやり方で支配するんだ。悔しくて、悲しくて、腹が立って、どうしようもない。

ミャンマーの人たちは優しい。この国で暮らした日本人は、誰もがそう言う。アウンサンスーチー氏の教えに従い、非暴力を貫いている人たち。週末から盛り上がるデモの中でも、絶対に武力は使わないようにしようと、はやる気持ちをなだめあっていた人たち。今起きているこの出来事の、どうしようもないやりきれなさを、どんな言葉を使えば、わかってもらえるだろうか。

▽ 囚人が街に放たれる

軍は、見えないところでもぬるりと動いている。彼らが動き出すのは、夜8時以降。戒厳令(夜8時から朝4時までの外出禁止)の時刻、無人になった街で、闇に紛れて動き出す。

2月9日の夜9時半頃、軍は国民民主連盟(NLD)党本部に侵入し、書類などを押収した。ここから微々たる法律違反を探すのだろう。彼らが目指すのはお

そらく、アウンサンスーチー氏への有罪判決、そして、彼女が率いる NLD の解党だ。国民の 9 割近くが支持する NLD がいなくなれば、次の選挙では軍の息のかかった政党が返り咲く、と彼らは信じているのだろう。

2 月 11 日には、刑務所に入っていた 2 万 3000 人もの囚人が「恩赦」をうけた。これで刑務所には、新たに 2 万 3000 人の逮捕者を受け入れる準備が整った。さらにありえないことに、恩赦を受けた囚人たちは、薬物を打たれて街に放たれ、各地で放火や家宅侵入などを起こしているという。

Facebook にアップされた動画の中では、住民らに取り押さえられ、刃物を取り上げられた元囚人が、虚ろな目で何かを話している。確かに、薬物を盛られているようにも見える。貯水タンクに毒を入れようとした少年もいたらしい。動画のコメント欄には「軍の挑発だ。その手には乗るな」とか「暴力を振るっちゃいけない」などの言葉が並ぶ。

法治国家日本で育った私は当初、いやいや、さすがに軍もそこまではしないのでは、と言いたくなかったが、実は全く同じことが、今までの軍事政権時代にも繰り返されてきた。例えば 1988 年にはこんなことがあったと記録されている。

整然としたデモが行われる一方で、刑務所から 8000 人以上が釈放された。人々は、各地区ごとに自警団を組織し、竹柵をめぐるして見張りを置いた。政府から送り込まれた「破壊分子」は、デモ隊のために路上に置かれた水がめに毒を入れたり民間の住宅地に放火しようとした。ヤンゴンでは、こうした「破壊分子」のうち 50 名ほどが市民のリンチや処刑によって、命を奪われた。そうした行為に対して、軍は治安維持のため、武力での支配を正当化した。(注 1)

さらにあり得ないことに、軍は理由なし・令状なしの家宅捜索や拘束を合法化(注 2)した。毎晩、全国の街や村で、CDM に加わった公務員や抗議運動のリーダーらが、一人ずつ拘束されていく。少しずつ、確実に、削がれていく抗議運動の戦力。

2 月 14 日、夜 9 時半頃には、自宅のすぐ外で激しく鍋を叩く音がした。いつもの抵抗運動ではない。警察や不審者がやって来たことを知らせる、警告音だ。ぎゅっと心臓が掴まれる。

音を聞いた周囲の住民らは戒厳令を破り、パイプや竹の棒を手に路上に飛び出して、音のした方向に向かって集団で走り出す。仲間が連行されないように、守りに行くのだ。軍や警察が手を出せないように、人間のバリケードをつくるのだ。

友人や同僚から、次々にメールが届く。「今、うちの前でも始まった」「絶対に外には出るな」。こわい。こんなのが毎晩続いたら、みんな滅入ってしまう。

いつも眠りの深い私も、最近は何か物音がするたびに目を覚ましている。その度に窓の外を確認し、スマホの画面を確認して、ああ今は何も起きていない、まだネットも繋がっている、と胸をなでおろす。再びウトウトして、また目がさめる。いやに喉が渇く。緊張しているんだろうな、と思う。

深夜 1 時から、インターネットが遮断されている。朝 9 時になると、ほとんどピツタリ時刻通りに回復する。軍は「国民が夜更かしをせずに健康でいられるように」と国営放送で説明したようだが、まさか軍が突然親切に市民の健康を気遣ってくれるはずはない。とはいえ、朝 9 時にネットが繋がってから、SNS を巡回してみても、何か特別なことが起きたわけでもなさそうで、言いようのない気持ち悪さだけが残る。

市民たちは、インターネット上に大規模な検閲システムを導入しているのではないかと憶測する。というのも、15 日からはサイバーセキュリティ法なるものが施行されるというのだ。これによって、軍がすべてのインターネット上の情報を、合法的に監視し、管理できるようになるという。映画かよ。

さらに、中国から連日、何かが大量に空輸されている。閉鎖されているはずのヤンゴン国際空港に、中国の昆明から 1 日何便もの飛行機が着陸していることが、フライトレーダーで確認されたのだ。中国が軍事クーデターに関与していると疑う市民たちは、兵士や武器、そしてネット検閲に長けた IT 技術者を送り込んでいると信じている。

一方、中国大使館は「空輸したのはシーフードです」と説明した。(翌日、中国大使館前で行われた抗議活動には「シーフードを持って帰れ」という横断幕が張られ、中国大使館はしばらく「海鮮市場」と呼ばれた。またプラカードには、「中国とロシアが密

かに軍政を支援していることを、世界は知らなければならぬ」と英語で書かれている) 水面下でじわじわと、独裁体制の網の目が張られていく。こういう薄気味の悪さは、ちょっと感じたことがない。今「政府」を自称する軍にとって、国民は守るべき対象ではなく、手錠をかける相手だ。監視し、支配し、服従させる相手だ。「政府は、国民の生活を守るためにある！」とピュアに信じていた私は、頭の中がお花畑だったんだな、と自嘲する。

<注>

1 永井浩ほか『アウンサンスーチー政権のミャンマ

◆2023年02月01日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(8)

Z世代が優しい抗議行動の前面に

西方浩実

昼間の抗議運動は、2月9日の銃撃後も、ますますピースフルに続いている。武装した警官隊や放水車は今日もデモ隊に睨みを効かせているが、物理的な弾圧はせずに様子を見ているようだ。人々は恐怖に屈することなく、シュプレヒコールを繰り返し、3本指を突き上げて歌を歌っている。友人たちは「さすがに疲れてきたよ」と笑いながら、今日も炎天下の中、出かけていく。

▽「クソみたいな元彼も、国軍よりはマシ！」

最近の抗議活動では、Generation Z と呼ばれる 20 代前半の若者たちが目立っている。ドレスアップしてパレードする女の子たちや、上半身裸で歩く筋肉自慢のムキムキ男子たち。交差点で hip-hop を踊るパフォーマンス集団もいれば、各国大使館前で管弦楽を奏でて平和を訴える学生もいる。盾を構える警官隊ひとりひとりに、バラの花を手渡して歩く若者の姿もある。そうしたクリエイティブな表現方法が、SNS に載せられ、世界に配信されていく。

「SAVE MYANMAR (ミャンマーを助けて)」「FREE OUR LEADERS (私たちのリーダーを解放して)」など、お決まりのキャッチコピーが多かったプラカードにも、次第にいろんなバリエーションが出てきた。「あのクソみたいな元彼も、国軍よりはマシ!」「独裁者

一』より筆者要約。

2 正確には『市民のプライバシーおよび安全を保護する法律』の一部を停止した(2月13日)。停止されたのは、7条「何人も、法律に基づく場合を除き、裁判所の許可なしに 24 時間を超えて身体を拘束されない」と、8条「政府機関は、令状・許可なく、住宅の立ち入り、強制捜査、私信の開封、財産の押収・破壊などをしてはならない」。つまり軍は、誰の許可もなく、市民を拘束したり、家宅捜索したり、郵便物や財産の横奪をしたりすることを可能にしたのだ。

よりも、恋人がほしい!」段ボールに英語で書かれた、ファニーなメッセージ。もちろんふざけているわけではない。彼らは、世界の注目を集めようと必死なのだ。画面の向こうの、外国にいる誰かに、ミャンマーで今何が起きているのか、気づいてほしいのだ。

たった3週間で、私はミャンマーの軍事独裁政権というものが、いかに腐っているかを思い知った。国民が選んだリーダーたちを捕まえて、政権を奪い、自分たちを批判する者を拘束してまわる。破壊分子を街に放ち、治安を脅かして人々を揺さぶる。インターネットや電話を、軍の都合で遮断する。法律をどんどん作り変え、行動や表現の自由を奪う。ストライキする公務員を、罰則をチラつかせて脅す。一方で、コロナ禍でずっと閉めていたお寺を解放して、参拝を我慢していた市民の歓心を買おうとする。そして、その手には乗らないぞ、と非暴力で声をあげ続ける市民を撃ち殺す。控えめに言っても、これは、クソだよ。

週末、私も抗議デモに出かけた。行き先はミニゴンの交差点。1988年の民主化運動(注1)の時にもデモ隊と警察とがにらみあった場所だ。高架橋の下には見渡す限りの大群衆が、立錐の余地もないほどに集まっている。人々は声を合わせて、民主化を叫ぶ。

拳を突き上げて歌う。願いをのせた声が、高架下に響きわたる。充滿する、軍政打倒へのエネルギー。インド系・バングラ系と思しき、肌の色が濃い人々もいる。ニューハーフの集団は、バッチリメイクで立っている。人種や性別を超えて、今はみんなで闘っている。中心部の熱源から少し離れた場所にはクーデター後に犠牲になった人たちの、小さな祭壇があった。3枚のモノクロ写真(注2)。感情を乱されるのが怖くて、直視できずに通り過ぎる。

裏通りには、山のようにお弁当を積んだトラックが到着する。売るのではない。デモ参加者に、片っ端から配るのだ。水やジュース、さらにはスイカまで、気前よく配られる。ゴミ袋を持って、デモ隊からゴミを回収して歩く若者たちもいる。そういえばこれだけの大人数が集まっているのに、足元には空き缶一つない。ポイ捨てが当たり前のこの国で。

広い交差点の中央では、若者たちによる抗議のパフォーマンス。車の流れが止まったその横で、せめて端の一車線が車用として機能するよう、汗を流しながら交通整理をする人の姿がある。夕方になると、群衆から少し離れたところに「Free Ferry」と手書きされた紙が貼られたワゴン車やトラックが集まり始める。参加者たちを家に送り届けるために、地域住民が無料の送迎サービスを提供しているのだ。

全体を仕切るリーダーなどいないというのに、みんな自分にできることを考え、足りないものがあれば自発的に補っていく。すべてが秩序だっていて、警察や軍につけいる隙を与えない。ねえ、この完璧な抗議をどうやって弾圧しようっていうの?できるものならやってごらんよ。そんな風に言いたくなる。デモを抜けた先には、紺色の警察車両が並んでいた。ぎっしりと警官を乗せたトラックが、5台ほどずらりと待機している。警官が何気なく携えている銃が目に入り、ドキッとする。市民を守るためじゃない。脅すため、殺すための銃だ。

デモから帰ってくる人たちが、トラックの横を通りすぎる。警官たちには目をやらず、でも掲げていたプラカードの向きを少しだけ変えて、トラックの方に向ける。プラカードの文字が、警官たちからよく見えるように。小さな小さな、抵抗。

みんなわかっている。自分たちが睨み合っている警察官は、本当の敵ではないこと。警察や軍隊を動か

す見えない敵に向かって、必死で抗議しているのだ。街では装甲車を見かけることが増えた。警察ではなく、軍が出てきている。自宅の近くでも、プラカードを掲げた市民たちが戦車と対峙していた。見慣れた街路樹、行きつけのコンビニ・・・普段と変わらない景色の中に、まるでコラージュのような軍用車両。

装甲車の前で、デモ隊は声を合わせ、軍への不服従を叫ぶ。民主化の歌を歌う。反軍政のプラカードを持って戦車の前に立ち、写真を撮る。装甲車にこっそり Democracy のステッカーを貼る。ときどき装甲車から兵士が出てきて、ステッカーを剥がす。

なんて平和で、優しい抗議なんだろう。でもこの穏やかさは、実はギリギリのバランスの上にある。市民が、少し調子にのって挑発しすぎれば、そして兵士がカッとになってボタンを押せば、市民は簡単に殺される。

▽「欲しいのはお金じゃない、人権だ」

「僕たちは、絶対に暴力を使わない」カレン族の友達からこの言葉を初めて聞いたのは、クーデター2日目の夜だった。「僕らが少しでも暴力的に抵抗すれば、軍は『国の治安を守る』と言って、徹底的に武力鎮圧しはじめる。そうやって僕らは、何度も弾圧されて、殺されて、負けてきたんだ」。それはその通りなのだろう。冷静で素晴らしい。だが、そうは言っても、5400万人の国民全員が非暴力を守らなければ、意味がない。誰か一人でも暴発すれば、その時はすべての国民に対する攻撃が始まるだろう。一人残らず非暴力を貫きつづけることなど、できるのだろうか・・・。

その不安は、高まる一方だった。6日から始まったデモはどんどん高揚し、その規模は膨張していった。Facebookには、放水を受けて地面に転がるデモ隊の映像や、警棒で殴られる市民の映像などが、繰り返し流れてくる。街では「抗議運動に参加しない人は殺人者(=軍)と同じだ」などという過激なポスターも見かけるようになった。深夜に家々を回っての逮捕が本格化し、囚人が街に放たれると、住民は交代で夜警を開始。寝ずの番で精神的にも追い詰められていった。

そろそろミャンマーのどこかで、誰かの忍耐がプツ

ンと切れるんじゃないか……。何度も不安が胸をよぎる。

しかしクーデターから半月以上が経っても、市民は見事に怒りに耐え、非暴力を貫いている。放水されたら、レインコートを着る。銃を向けられたら、ヘルメットを被る。夜間の不当な逮捕には、地域のおじさんが棒を片手に待ち構える。取り押さえた不審者が自分たちの街に火をつけようとしていても、暴力は振るわない。その背後にあるものを、よく知っているからだ。

何十万、何百万もの人が、暴発せず、なだめあっている。その忍耐が、彼らの怒りや悲しみをさらに深める。奇跡を見ているようだ。

昨日久しぶりに電話したカレン族の友達は、繰り返した。

「絶対に、絶対に、暴力は使わない。軍は、1988年と全く同じやり方で僕らを挑発している。でも僕たちだって、同じ轍は踏まない。向こうが暴力を使ったら、逃げるよ。逃げて、隠れて、向こうが諦めたらまた出て行く」

◆2023年02月04日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(9)

「2222」ゼネスト、全国の経済活動が停止 西方浩美

クーデター後、3週目。あからさまに街に姿を見せはじめた軍や戦車の前で、必死の非暴力デモが続いていた。ところが2月16日、火曜日。市民の運動は、勢いをなくしたように見えた。いつもなら朝9時すぎから響いてくるデモの音楽や掛け声が、お昼前になっても、なかなか聞こえてこない。インターネットのライブ配信には、もはや見慣れたデモの映像が延々と流れている。ヤバイ、みんな疲れてきたかな……。

▽壊れた？車が道路にいっぱい

デモが始まって半月、いつ弾圧されるかもわからない不安の中、武装警官や戦車と毎日向き合い続けているのだ。この炎天下で連日屋外に立ち続けられれば、体力だって消耗する。仕事だって、ずっと欠勤を続

私たちが日本人にできることはないかな。例えば、日本で募金を集めたりすることは、できるかもしれない。そう尋ねると、彼は、うーん、と少し考えてこう言った。

「お金はいらない。僕らがほしいのは、人権だ。この2週間でわかったでしょう？軍政下には僕らの人権はない。お金じゃない、人権なんだよ」

<注>

1. 1988年、ヤンゴン大学の学生が中心となって、軍事独裁政権打倒を目指す大規模な民主化運動が行われた。8月8日にはミャンマー全土で大規模なデモ活動が展開されたが、軍はこれを凄惨に弾圧。3000人とも言われる死者を出した。

2. 2月9日にネピドーで頭部を撃たれた少女のほかにも、クーデター後に数名が何者かに殺害されていた。例えば、外出禁止の夜間に自警団の一員として地域の見張りをしていた住民が銃殺される、など。犯人は捕まっていなかったが、軍の仕業と信じる市民は多かった。

けるわけにはいかない。民主化するまでいつまでもデモを続けられるわけではないのだ。だけど抗議することをやめてしまったら……軍政は固定化してしまう。

知り合いのミャンマー人は、静かにこう言った。

「この闘いには、出口がない。朝から夕方までデモをやって、夜8時から鍋を叩いて、それで？2ヶ月、3ヶ月、そのあとは？……僕らは今、じわじわと負け始めているんだ」

翌日、朝8時。自宅でぼんやりしていると、遠くから、地鳴りのような叫び声が響いてきた。

軍事独裁政権はいらない！デモクラシー！うおおお……

なんだかよくわからないけど、何かが起きている。抵抗運動が、ものすごい規模になって息を吹き返している。

郊外に住む友人から次々と連絡が入る。「人々が道路を封鎖している」「橋が塞がれてヤンゴン市内に入れない」。幹線道路を塞げば、人々は仕事に行けなくなる。国の経済は止まる。軍に国家運営させないための、CDM(市民不服従運動)活動の一環だろう。

慌ててパソコンの電源を入れ、地元メディアが配信するライブ映像を開くと、スーレーパゴダ近くの交差点(ダウンタウンの中心部)に座り込んでいる人の姿。自宅近くの交差点でも、車が斜めに止まって、道を塞いでいた。

ああ、これはやばい、やりすぎだ……。道路を塞ぐという実力行使は、軍の介入を招く。いよいよ市民たちが強制排除されてしまう……。一人、パソコンの前で頭をかかえる。

……。しかし、ヤンゴン市民は一枚上手だった。彼らは道路の中央におもむろに車を止めると、ボンネットを開け「あれ？車が壊れた」と言い始めたのだ。運転手はわざわざ「おかしいなあ」などとつぶやきながら、ボンネットをあける。首を傾げる。困ったなあ、車が動かないなあ。それを遠巻きに眺めていたサイカー(自転車タクシー)のおじさんたちが、笑顔で拍手を送る。夕方になると、あれ、ふしぎだな、車が直ったぞ、ということで、みんな平和に家に帰った。

心が痛くなるほどの民主化への渴望と、ユーモラスな表現方法。うまくやったな、と笑い出したくなる。

交通が遮断された幹線道路上は、人の海となった。地面が見えないほどの群衆が、波のように揺れ、声を轟かせる。警察や軍も、放水車や戦車を出せるような状態ではない。道路は故障車でいっぱいなのだから。ミャンマー市民は、まだまだ負けない。

▽揺るがぬ軍政、市民は長い闘いを覚悟

2021年2月22日、「2」が5つ揃うゾロ目の日。ミャンマーの民主化運動の歴史において象徴的な、8888民主化運動(注1)にちなみ、全国で最大規模の「2222」ゼネストが呼びかけられた。工場やショッピングモールはもちろん、地元の市場や、小さな露店にいたるまで、ほとんどすべての店が休業した。そして大勢のミャンマー市民が、怒濤のように街に出た。

自宅前の、普段それほど人通りのない道にも、赤いリボンやハチマキをつけた人が、どこからかわらわらと溢れ出してくる。ヤンゴンの最高気温は35℃。充満する人々の熱気が、さらに体感温度を上げる。

昨日、また軍によって一般市民が撃ち殺された。しかし人々はひるまない。軍が非人道的に振る舞うほど、人々の悲しみや怒りに裏打ちされ、打倒軍政の思いは揺るぎないものになっていく。

2222 インヤー湖畔の広い土手には、何百メートルにもわたり、人々が隙間なくぎっしり座って声を上げていた。白い服が多いのは、撃たれた時に血の色がわかるためだという。たとえ撃たれても、その血の色が世界に報道されれば、軍政にダメージを与えられるかもしれない。死んでもあきらめない覚悟。自由や人権とは、命とひきかえにしてでも守るべきものだったのだと、ミャンマー人の行動を見て、思い知る。

すぐ傍の高架下には、警察車両が停まっている。外から警官の姿は見えないが、上層部からの出動命令が下れば、赤スカーフを巻いた「治安部隊」が銃を手に出してくるのだろう。ぞっとする。とはいえ、湖畔に集まった途方もない大群衆と比べると、1台の警察車両はあまりにも非力に見える。高架橋に響き渡るシュプレヒコールや歌声をBGMに、警察車両にくるりと背をむけて歩き出す。

夕方、ヤンゴンのデモ隊は、平和に解散した。弾圧はなかった。ほっと胸をなでおろす。弾圧の理由などどこにも見当たらない、平和で秩序だったデモ。それでも治安維持などを理由に市民を殺すのが、ミ

ヤンマーの軍政だ。

1988年3月、まさにこのインヤー湖畔で、抗議運動をするヤンゴン大学の学生に対して、凄惨な鎮圧が行われたのだという。治安部隊の発砲により、湖に追い詰められ、溺死した学生。湖に蹴落とされ、這い上がったところをまた殴られる者。拘束された女子学生たちは、刑務所内で袋を被せられ、強姦されたという。そうしたやり口で民衆を黙らせ、権力の座にとどまり続けた軍は、私欲のためにジャブジャブお金を使い、足りなくなると公共料金を値上げした。批判する者がいれば、罪をでっちあげて投獄した。人々は5人以上で集まることを禁じられ、夜間は外に出られず、公的な手続きの際には、賄賂を払わねばならなかった。(注2)

その国軍が、戻ってきた。だから、ミャンマー人は叫ぶのだ。絶対に軍政は受け入れない、民主主義を返せ、と。

2月22日の大規模ゼネストで、国じゅうの経済活動は一斉に止まった。人々は「今日で軍政を終わらせるぞ」と息巻いていたが、軍政は(少なくとも表面上は)ぴくりとも揺るがず、軍が譲歩することも何ひとつなかった。

23日以降は、ずっとデモに参加していた人々も職場に戻り始めた、という話も聞き、ああ軍への抵抗も少しずつ萎んでいくんだろうか、と私もなんだかしょんぼりした気持ちになった。だが、そんな私の不安をよそに、抗議活動は今日も勢いよく続いている。(よかった…!)

ミャンマーで連日続くデモ。もしかしたら日本の報道では、街のすべての場所で、朝から晩までデモをやっているように見えるかもしれない。でも、実際は違う。デモをやっている場所は、だいたい決まっている。

例えば、学生が集う「ヤンゴンの原宿」、レダンの交差点。1988年にデモ隊が治安警察と睨みあったミニゴンの高架下。各国の大使館前、など。そこから離れると、街はいつも通り穏やかな表情をしている。露店で色とりどりの野菜が売られ、タクシーやバスもどうにか走っている。スーパーマーケットは、軍系企業の製品を棚から引っ込めて(注3)営業を続けている。毎日大規模なデモを続けながらも、日常の暮らしは、ある程度きちんと維持されているのだ。

デモの時間もだいたい決まっている。朝10時ごろから盛り上がり、夕方4時頃にはきれいに解散する。実はこれは、最初から一貫している。どれだけ軍政に激怒していても、22日の全国ゼネストの日ですら、決して夜まで叫び続けたりはしなかった。疲れるからじゃない。明日も明後日も、デモを続けるからだ。また明日、朝から声をあげるために、人々は秩序を保っている。長い闘いになることを、ミャンマー人は覚悟していると思う。

(注)

- 1, 1988年の民主化運動は8月8日の全国デモとゼネストで最高潮に達したことから「8888」と呼ばれる。
2. 1988年および軍政下の社会についての参考文献は、永井浩ほか『アウンサンスーチー政権のミャンマー』を参照
3. ミャンマー国軍は巨大な複合企業体を持っており、銀行、保険、観光、貿易、建設など、あらゆる分野において百数十社の企業を傘下に置いている。その利益は非課税・非公表で、国家予算の国防費よりも大きいとされる。クーデター翌日から、こうした軍系企業の商品をボイコットする動きが始まった。SNS上では無名の市民が作成したボイコットリストが拡散され、大手スーパーでも軍系企業の製品が、売り場から下げられた。また、軍への納税や公共料金の支払拒否の動きも広がり、スーパーや飲食店などでも客から消費税をとらないなど、徹底した不服従活動が行われた。